

# 六朝文人伝

——『梁書』沈約伝——

森野繁夫

①沈約、字は休文、呉興郡・武康県の人である。祖父は林子で、宋の征虜將軍、父は璞で、淮南太守であった。璞は元嘉の末に誅殺され、幼少であった約は跡をくらませたが、後に赦免された。やがて他郷にさすらい、よるべなく貧しかったが、篤く勉学を好み、昼夜、怠らなかつた。母は約が、その苦勞のために病氣になりはしめないかと心配して、いつも（家人にこつそりと）油を減らさせて、火を消した。かくして、昼に読んだところは、夜にはもう暗誦しており、ために広く多くの書物に通じ、能く文章を作つた。

④初めて官に挙げられて奉朝請となつた。洛陽の蔡興宗は彼の才能を耳にして厚く遇した。興宗が郢州の刺史になると、取りたてて安西將軍の外兵參軍とし、記室を兼ねさせた。興宗はかつて子供たちに、「沈記室は人倫の手本である。よくお仕えしなさい」と言つた。荊州の刺史になると、さらに征西將軍の記室參軍として、廩西県の令も兼ねた。興宗が亡くなると、まず、安西將軍である晋安王の法曹參

軍となり、ついで外兵參軍に転じたが、並びに記室を兼ねていた。その後、中央政府に入り、尚書度支郎となつた。齊の初め、征虜將軍の記室となり、襄陽の令を兼ねた。

⑤齊の初め、征虜將軍の記室となり、襄陽の令を兼ねた。奉じた王は、齊の文惠太子であった。太子が東宮に入ると、歩兵校尉となつて書記を掌り、永寿省に当直し、四部の圖書を校合した。当時、東宮には有能の士が多かつたが、沈約は特別に親遇せられ、当直のたびにお目通りし、日影が斜めになつてはじめて退出した。そのころ、王侯が東宮に來ても、太子に会えないことがあり、約がそのことを言うた。太子は「私が平素から朝寢坊なのは、そなたのよく知っているところ。そなたの談論を聞いて、寝るのを忘れるからである。私に早く起きてほしいのなら、いつも早くやつて來なさい」と言つた。太子家令に遷り、後に本官のまま著作郎を兼ね、中書郎、本邑の中正、司徒右長史、黄門侍郎に遷つた。

⑥時に竟陵王も亦た有能の士を招いており、約は蘭陵の蕭

琛、琅邪の王融、陳郡の謝朓、南郷の范雲、樂安の任昉らと、皆でここに遊んだ。当時の人々は「人材を得た」とうわさした。ほどなく、尚書左丞を兼ね、ついで御史中丞となり、車騎長史に転じた。隆昌元年に吏部郎の任を授けられ、地方に出て寧朔將軍・東陽太守となった。

明帝が即位して、輔國將軍に進められ、召されて五兵尚書となり、国子祭酒に遷った。明帝が崩ずると、政權は冢宰の手に委ねられ、尚書令の徐孝嗣は約に遺詔を撰定させた。左衛將軍に遷り、ついで通直散騎常侍を加えられた。永元二年、母が老いたことを理由に上表して辭職を願ひ、改めて冠軍將軍・司徒左長史、征虜將軍・南清河太守を授けられた。

高祖は、竟陵王の西邸に出入りしていた時から、約と交ること久しく、建康城が平定されると、引いて驃騎將軍の司馬とした。將軍職はもとのままであった。時に高祖の功業は成就し、天意と人意がまことに即位にかなっていた。約はかつて高祖にそのことをほめかけたが、高祖は黙って答えなかった。別の日、さらに進みで言った「今は昔と違って、淳朴の風俗を天下の人々に期待することはできません。士大夫で、龍に攀ぢ鳳に附こうとする者は、わずかでも功績を立てて、それで俸禄を保証してほしいと望んでおります。今や子供や牧童さえも、すべて齊の天禄が終わったことを知り、あなたこそ天子の位に即かれるお方だ

と言わない者はありません。天空や世の中の様子は、革命の徴候を示しており、それは永元以来、とりわけ顯著であります。讖に『行中水は天子と作る』とあります。これは又た歴然として記録に残っていることであります。天の意志に違つてはなりませんし、民衆の情を失つてはなりません。もし帝位に即くべき命運であれば、謙讓して徳の光を増す生き方を願つても、それはできないことです」と。高祖は、「私は今そのことを思案しているところだ」と言つた。

それを聞いて、約は、「あなたが先に樊・沔で兵を起こされた、その時にこそ思案されて然るべきことです。今や王業は成就しており、何を思案することがありますでしょうか。昔、武王が紂を伐つた時、その国に入るや、民がすぐに『わが君』と言いました。武王は民衆の意向にそむくことなく、また思案することはありませんでした。あなたが都に入られてから、陰陽の気の次第は変わりつつありますが、周の武王に比較して、（即位の時期に）遅速のちがいがありません。早く大業を定め、天意と民情の期待をしっかりとつかないでおかれなないと、もし一人の異を立てる者が出てくれば、すぐに威徳をそこなうことになりましょう。そのうえ、人の寿命は金石のようにならなくても続くものでなく、時世の事態はそのままの状態を保ち難いものです。どうして建安公の封土を子孫に残すことができましょうか。天子が都に

還り、公卿が位に在れば、君臣としての分が定まり、臣下に異心をいだく者はおりますまい。君が上に明察であり、下に臣下が真心を尽くせば、どうして寄り集まって賊害を企てる者がありましようか」と言った。高祖は、その通りであると納得した。

約は外に出た。高祖は范雲を召して即位のことを告げた。雲の答えは、だいたい約の趣旨と同じであった。高祖が言った、「智者の考えは暗に一致しているものだな。そなたは明朝早く、沈休文をつれて、またやって来なさい」と。雲は外に出て約と相談した。約が言った、「そなたは必ず私を待ってくれ」と。雲は承諾した。ところが約は、約束の時間よりも早く中に入った。高祖は約に、その事の草案を作らせた。約は懷中から詔書、ならびに諸人の役職の配置を取り出して見せたが、それは高祖が全く改める必要のないものであった。

しばらくして雲がやって来て殿門に着いたが、中に入ることができず、寿光閣の外でうろうろして、ただ「チエツ、チエツ」と言うだけであった。約が出てくると、雲がたずねた、「私の所遇は、どう決定されたのか」と。約は手をあげて左を向いた。雲は笑って、「望み通りだ」と言った。やがて高祖は范雲を召して、「平生、沈休文と一緒に居たが、人とちがったところがあるのに気がつかなかつたが、今日の彼は才智縦横であり、明らかな見識の持主といえよ

う」と。すると雲は、「あなたが今、約をお知りになったのは、約が今あなたを知ったのと同じであります」と言った。高祖は、「私が兵を起こしてから今に至るまで三年になる。功臣や將軍たちは実によく骨折ってくれた。しかし、帝業を成就してくれたのは、そなたたち二人であるぞ」と。梁国の政府ができる<sup>④</sup>と、約は散騎常侍・吏部尚書となり、右僕射を兼ねた。高祖が禪讓を受けると、尚書僕射となり、建昌県侯に封ぜられ、邑千戸で、常侍はもとのままであった。また約の母謝氏は建昌国太夫人とされた。命を賜わった日には、右僕射范雲ら二十餘人がやってきて、拜礼を行ない、世の人々はそれを光榮なこととした。すぐにまた尚書左僕射に遷り、常侍はもとのままであった。ついで領軍將軍を兼ね、侍中を加えられた。

天監二年、母が亡くなった時、天子は車で自からおどましになり、弔問され、約が年老いて喪に服して瘦せ細るのは宜しくないとして、中書舍人を遣して客をことわり、哭礼をほどほにするようにさせられた。やがて挙げられて、鎮軍將軍・丹陽尹となり、佐史を置いた。服喪が終わると、侍中・右光祿大夫に遷り、太子詹事・揚州大中正を兼ね、尚書八条の事に関わった。やがて尚書令に遷り、侍中・詹事・中正はもとのままであった。たびたび辞讓の意を述べ、改めて尚書左僕射を授けられ、中書令・前將軍を兼ね、佐史を置いた。侍中はもとのまま。ついで尚書令に遷り、太

子少傳を兼ねた。九年には左光祿大夫に転じ、侍中・少傳はもとのままで、鼓吹一部を賜わった。

約は長らく宰相の地位にいて、三公の位に就くのを願っていた。論者は皆な適當であると思つたが、天子は最後まで三公にしようとはしなかつた。そこで約は地方に出ることを求めたが、それもまた許されなかつた。約は徐勉と平素から仲が善かつたので、手紙でその氣持ちを勉に述べた。

「私は幼い頃に父を亡くして苦しみ、傍らには頼るべき兄弟・親族はいなかつた。かつては落ちぶれてしまいうで、不幸な状態にあくせくし、朝夕 困窮をきわめた。うだつのあがらぬ役人として辛苦したが、それは自分のためではなかつた。そうして、わずかの俸禄を手に入れるために、東に帰つて来た。かくして十年たつてはじめて、襄陽県の令に任命された。公私ともに納得できる状態ではなかつたが、我が身を世に捧げたからには、世間のことにかかずらわれないわけにはいかなかつた。永明の末に地方に出て東陽太守となつたが、それは『足るを知り、止まるを知る』<sup>⑧</sup>という思いからであつた。かくして高宗が位に即き、建武の世になつたが、世の中のことがまつわりつき、それに押し流されて、止足の思いを果たすことは容易でなかつた。

東昏侯の初め、政令が一途から出ず、ために隱退を考へたところ、何とかかなりそうであつたので、そなたに託

して、心のうちを徐令<sup>⑨</sup>にうち明けた。そのことはまだ記憶に新たなどころである。

聖道の行なわれる梁の世となり、謬つて嘉運にめぐりあい、かねてからの志は、復た遂げられなくなつた。今年が明けて、老年を優遇する礼が行なわれ、辭職の請願は、天子の恩恵によつて奪われてしまつた。誠に徳化の善政を広く宣べ、朝廷の聖道を大いに明らかにすることではできないながらも、なお書類を検討し、時に意見を述べて、お役に立とうとした。しかし、年の初めより、病氣が重くなり心配もつのできた。寿命には限りがあり、骨の折れる仕事過ぎるため、この枯れつきた身体をまとめて、晩年に帰すべきであるのに、杖を牽いて行止し、努めて仕事に励んでいる。

外側から見ると、健康なようにみえても、身体のはたらきは、うまくまとまつて動いてはくれない。いつもしつかりと我が身体を保つて、はじめて勤務につくことができる。衣服をぬいで横になると、手足と身体がバラバラになつたようだ。頭は熱く下の方は寒く、それは日に日に次第に悪くなり、暖くすると熱が出て頭が痛くなり、冷やすと必ず下痢をする。後の治療は先の治療に及ばず、後の病気のつらさは必ず先のそれよりもひどい。百日、数十日たてば、革の帯はいつも穴をかえるようであり、手で腕を握ると、だいたい月ごとに半分は小さくなつて

いる。これらのことから考えてみるに、どうして長く持ちこたえることができよう。このような状態で休息しないで、一日、もう一日、と引きのばしていると、聖主に先立つという恨みを残しそうだ。そのため、あえて上表し、辞職して老年を送るための俸禄を乞いたい。もし天が年をかし与えてくれ、健康をとりもどしたならば、わが才力の堪えられるかぎり、国家のために力を尽くしたいと思っている。」

勉は約のためにそのことを高祖に言つて、三司の事を請うたが、許されず、ただ鼓吹を加えられただけであつた。約は生まれつき酒を飲まず、欲が少なく、高い地位について、居處は儉素であつた。住居を東田<sup>④</sup>に作り、そこからは郊外の丘山が見渡せた。かつて「郊居の賦」を作つたが、その辞は次のようである。

至人は道と一体となつて、物と我との両方を忘れてしまふ。しかし中智以下の人となると、皆なそれぞれ性にかなうところを落ちつき場所とする。獸は窟があるから馳せることができるし、鳥は先ず巢を作つてから翔ける。陳平は路地の貧しいくらしから漢の高祖に仕えて曲逆侯となり、晏嬰は湫隘<sup>じゅうがい</sup>した地に居て徳業が盛んとなつた。子産は仁者として東里に住み、謝靈運は鳳のごとく西堂に身を隠した。さて私はといえれば狭い志の持主で、世の中を治める大方策とて無く、鳥のように林に依つて羽を

おさめたく思い、魚のように水に託して鱗を蔵<sup>かく</sup>すことを願つてゐる。言うまでもなく莊麗な家を持つ気もないし、大通りの交錯する都に住むつもりもない。東の郊外の静かで広々とした所に分け入り、ヨモギやアカザの生えている荒地をえらび、気のむくままに家を構えたが、これも風や雨は結構ふせげるのである。

その昔、西漢の末葉に、わが祖先の流浪は始まり、海昏侯の爵位<sup>⑤</sup>を辞して、わが故郷を長江の岸边に創<sup>はじめ</sup>めた。そうして河・済の地に居ると同じく、世に重んじられ、班生の百年を越えるほどであつた。その間、俸禄を辞退して耕作に従事した者もあり、冠の塵を払つて出仕した者もあつた。東晋の隆安年間<sup>⑥</sup>に、国運は艱難を極め、世の中に次々と争いがおこつて波のごとく流れ、人民は乱世のなかで恐れおののいてゐた。村々には死人が乱麻のようにつらなり、道のほとりには白骨が莽<sup>ぼう</sup>のように暴<sup>ざつ</sup>され、大地は広くても身のおき所もなく、大空は遙かに遠く訴えようもなかつた。我が祖先が衰えていた頃、ちようど此の艱難にあい、危邦を避けて苦勞をかさね、安穩な土地を求めてそこに移り住んだ。かくて初めて居所を朱方<sup>⑦</sup>に定め、閑かな庭に安らぎ息うことができた。時に宋の武帝が鬱然として起こる時にあたり、(わが先祖は)風に憑<sup>よ</sup>つて翼を矯<sup>か</sup>げた。健康を指して車の轅<sup>えん</sup>を南に向け、都の大通りを車に乗つて思うままに馳<sup>は</sup>せた。かつての華

やかな扉を此の地に移して啓き、高い横木を張つてここに立てた。長くつづく坂道のそばに、清らかに流れる秦淮の流れに面していた。この先祖の遺業は次第に遠くなり、世道はにわかになくまた低く、これまで四代をかさねて、このしがないう我が身に先祖の祭祀の役が降りてきた。あゝ、わがあばら屋の保ち難いことは、朽ちた竹の皮が風に吹かれるようであり、茅を刈り棘を翦つて耕したり、西に行き、また東にとかけまわる。董京のように白社で物乞いをしたり、梁鴻のように伯通の所で賃働きをした。

我が平生の耿介の思いをたずねてみるに、まことに外物に役せられず自由に遊ぶことを願っていた。幽人を思つて心をめぐらせ、東の丘を望んで長く想いにふけていた。このように本もと外物を追いかけることを忘れていたのであるが、今やいたずらに天地の間につなぎとめられてしまった。応璩はしばしば印綬を執ることを歎き、陸機は「世網に嬰る」と詠いおこした。世事は滔々と過ぎ去つて我が願いはかなわず、志は帽々と憂い気のはれることはない。わが世路は今にも尽きんとして彌々峭しく、わが情は晩年になつて踰々大きくふくらむ。蘭のごとく清らかな寸心を抱くも、何とこの願いの浩蕩なことよ。「帰らんかな」を詠じて徘徊し、高山のほとりを眷りみて掌をうつ。

ちやうど天子が徳を喪つた時に逢つたが、何と東昏侯の暴虐の甚だしかつたことか。それは「牧誓」篇にも述べられず、「湯誓」篇にも記されなかつたことである。かの民衆のおののくさまは、獣の口に垂らされて餌食とされたようであつた。大空を仰いでも身を寄せる所は無く、犠牲でもないのに切身とされる。即位する前には徳化を期待していたが、終には曲がつた組みひもとなつてしまつた。民を愛する上天のことを思うにつけても、民を虐げることがこれほどひどいことはなかつた。雍州刺史であつた高祖が兵を襄陽に挙げたのは、まことに天命を受けてなされたものである。天が高祖に祥瑞を降し始めた時こそ、東昏侯の積悪が極に達していたのである。高祖は洪水のために溺れんとする民を救い、重なつた災いを濁つた朝廷から取り除いた。みずから、朝食をとる暇もないほど勤め、いつも夜の枕もとに着物をさがした。舜・禹を自在に使いこなし、さらに黄帝、顓頊をも駆け走らせるほどの、その徳はどんなに遠くても被らない所は無く、その光はどんな隅でも照らさない所は無かつた。大いなる恩沢を大荒の山に至るまで施し、仁風を遠くえびすの地にまで及ぼした。永遠の事業を始めて遐かなる将来に思いをはせる、まことに高祖のはかりごとは玉のごとくであつた。

さて、龍馬が河図を銜えて出る盛んな御代となり、聖人が世を治める嘉き時世となった。その初めに私は齊の侍中の職を辞し、かたじけなくも天子の輔佐役に任命された。高固のように石を投げて敵を虜にした猛志は無く、魯仲連のように矢につけた手紙で相手を屈服させた麗辞は無い。それなのに陽鳥を除いて邑を賜わり、長河・泰山に誓って末代に至るまでの基礎を作った。また太子の輔佐役となり、百官の長である尚書令となったが、小人である私はそれらをすぐに失ってしまうのではないかと恐れ、天子の恩顧と俸禄の保ち難いことを心配した。

さて、前世の顕達した人たちのうち、隱栖に心を向けた者は罕であった。趙の叢台、楚の章華台をねがって、つねに奢りをきわめて競いあった。りっぱな邸宅を洛陽の銅駝街に作り、高門を宮城の北闕に競わせ、都のうちに重門を開いて、蓬蒿にうまれる隠者のくらしなど思いもしない。しかし、孫叔敖は人が見向きもしない土地に封ぜられるよう遺言したし、蕭何は辺鄙な土地に家を建てた。私は先哲の心を味わって考えを述べる、それはまことに私の心の好むところである。権力を城市のうちに得ようとせず、名声を下賤なやからのうちに求めたりもしない。「希微」の詩を詠いながら家を建て、風や霜をしのぐことさえできればと思ふ。

かくして奥深い野原にそって、荒れた郊外に至るあた

りに、枯れた荻を編み、枯れた茅で屋根を葺く。鳥が棲み蟬が噪ぐ所に作り、鹿の足跡の交わっている所に築く。檐のじやまになるので木を切り、土台のさまたげになるので巢を取り除いた。たまり水の水はけをよくし、井戸のそばのくぼみに土を入れる。芳しい枳を北の渠に植え、長い柳を南の浦に樹える。こわれた甕の窓を蘭の室に遷し、肩牆を華の堵につづける。草木を織って門を作り、外扉を戸として使う。さて、庭の木蔭ですずみ、また籬のそばで杜の芳き香りをかぐ。閨室を開いて遠くをながめ、高い窓を開いてあまねく見渡す。雨だれは沼ぎしに通じており、あぜみちは堂下をめぐっている。そこに生えている水草には、蘋萍・芡芰、青藻・菘菹、石衣・海髮、黄荇・緑蒲があり、紅い蓮の花は軽やかな波にゆれ、碧の葉は澄んだ湖を覆っている。その嘉き実を食べて老いを退け、羽衣を天帝の都にとのえようとす。その陸草には、紫鼈・緑施、天蓍・山韭、雁齒・麋舌、牛脣・彘首がある。南池の北にあまねく広がり、北楼の後に爛漫と生え、渚やあたりの地面をおおったり、窓にからみつき中をうかがっている。

園宅が特別仕立にしてあり、田圃が他のそれと別にされていくようなのは、例えば李衡に橘林千樹があり、石崇に雜果万株があったが、いずれも金持ちのおごりであり、儉やかな思ひの娛しむところではない。私としては、

樹木はあたりにひろがり生い茂り、緑の枝葉を吐き朱い花を集めむらがらせ、窓に羅なり戸に映え、雷に接し家の四隅につづき、丹い房を開いて四方を照らし、翠の葉をのぼし枝を広げ、紅い英を紫の蒂から出し、素い薬を青い跗に含ませたい。

その林鳥は、ひらひらと飛びまわり、鳴き声もそれにつれて上下する。楚雀には名前が多くあり、枝をめぐつて啼きかわす。斑の尾に綺のような翼のものや、緑の衿に緋い額のものが出て、好んで葉に隠れ枝に蔽れ、かとおもうと乍ちあちこちに往き来する。

その水鳥は、大鴻・小雁、天狗・沢虞、秋鷺・寒鶉、脩鷗・短鳧がいて、長い、あるいは短い弱藻をくわえて曳き、水に見えかくれしながら軽やかな体を戯ばせている。翅は流れをはじいて沫を立て、翼は浪を鼓つて珠をとばす。

その魚は、赤い鯉・青い魴、織い脩・鉅い鱧がおり、碧の鱗・朱い尾、脩い頭・偃さつた額のものがある。小さいのは渚で戯れて水紋をつくり、大きいのは流れにはねてしぶきを揚げる。江海を羨しいと思うこともなく、聊か我が宅で憂いを忘れる。

その竹は、東南のものが独り秀でており、九州の宝蔵のうち奇をほしいままにしている。淇水より遷し植えたものでもないし、楽池から根を分けたものでもない。秋

の蟬が葉で吟き、寒雀が枝で噪ぎ、南の軒の下に風をまねき、北堂のほとりで雪を負う。

前人の通つた軌跡をたずね、昔の識者の誠と偽りを観察するに、毎に無を誅めて有を索め、皆な難を指して易とし、自から退いて分に安んじようとせず、いずれもすぐれた人物でありながら累いをひきおこしている。これは昔士の迷つた点であり、私が今、避けようとしているところである。

神農氏が始めた事業を原ね、種をまくことの始まりをしらべる。初めて火を使つて煮炊きし穀物を食べたのが、人間の寿命を延ばすことになつた。過去の記録で井田について調べ、前代の書物で阡陌のことを考える。顔淵は一簞の食物で満足して道を樂しみ、鄭玄は高い才能を持ちながら倉の中は空であつた。張禹は四百頃土地を持ちながら満足しなかつたが、顔淵は五十畝の土地で十分であつた。心のうちをおさめ念いを踏めて、わずかの庭や家でくらししていこう。東の荒地を耕した古い耜を束ねて、北の畑の新しい渠に浸す。暁の蓐をかまどにくべることもなく、朝の食事に事欠いてひもじい思いをすることもない。官職・名誉などの外物を全てしりぞける、ただ累いをなすものといえれば我が身だけ。千斯の倉も問題にしないし、汶陽の田も羨しくはない。

東南の方に向かって目を騁せ、丘に登つて眺める。こ

の山は小さいけれども、謝安が宴を開いた所である。四頭だての馬車を高く低く駆けさせ、たくさんのあし笛の清らかな音色を響かせる。方・円の敷物を羅ねて綺のようにし、海や山の珍味を餘すところなく薦める。わずかの権勢など偉とするに足らぬとし、千金をつかうこと糸すじのようであった。これは試みに私の臆測を述べたままであり、この風習を盛んにしようというのではない。或いはそこには達人の遠旨があつて、凡人には窺い知れないことなのかもしれない。聊か気持ちをかえて目を遷せば、帰津に方山が見える。桂渚に長い汀があるのは、初めて強秦に鍤を挙げた所である。路は呉をめぐつて越に至り、塗は海をこえて閩に通じている。三鳥を懐つて長くしたうのは、故郷こそ大切にすべきものだから。まことに晩年に帰る時期を選んだのは、今になつてもとの歩き方を忘れたためではない。何と東川の広く果てしないことよ、ただ私に涙を流させる。私は昔、謬つて賢人たちの仲間入りをして、しばしば徒らに此の地に遊んだものだ。美しい旗のもとに侍し轡を並べ、龍舟のお供をして渚にしたがい、席に列なつて詩を賦したり、杯を並べて楽しみ語つた。しかし御霊をまつる帷は一朝にして冥漠くなり、西陵は忽ち草木が茂る。商飴館を望んで永く歎み、毎にこの観で楽しんだことを思う。始まりは鍾・磬が鳴りひびき、終りは魚龍の瀾漫たる戯。あるときは

升降が順序正しくおこなわれ、あるときは罰杯で酔うまで飲んだ。貴さでは丙吉・魏相・蕭何・曹参のような方々親しさでは梁の孝王、周公旦のような方々、いずれも霜霧とともに滅えてしまい、風雲とともに消散してしまわれた。

孫后の墓田を眺め、覇者の足跡を尋ねる。まことに漢を受けつぐ王者であり、呉国を開いた英主である。衡岳を指して国の鎮めとし、長江と漢水を包みこんで我が家とした。しかし、徒らに石椁のことばを徴し、遂に金縷の災いを延きおこしてしまった。墳墓は忽ち荒れはてて修理はされず、原陵に草木が茂つてゐると変りがない。どうして墳墓が螻蛄や狐兔の住みかになると知つていたであろうか。きこりや牧童などが行き来するなどは勿論である。東の小山をながめてみると、心は悽々として楽しまない。そこは、昔お仕えた皇太子の旧苑であり、博望苑の名残りの土台がある。林を修めるには前の方に桂樹を樹え、草を列ねるには芳芝を上の方におく。風台は翼をかさね、月樹は柵をかさね、千ものますがたがそびえ立ち、百もの柱が組み合わさつていた。黒い轅で林に行き、蘭の柁の舟で水遊びをした。しかし、三年の後太子は亡くなり、たちまち二十数年を経て現在にいたつた。すべてあとかたもなく洗い流されているが、その時と今とは古今というほど時を異にしているわけではな

い。

わが眸を東北の方向にめぐらし、仙人の館を峰の上に見る。仙人の道はよくわからず手がかりとなるものは残されていないが、そこには学ぶべき遺訓がある。始めに霞を食べ霧を吐き、終に虚空を陵いで太陽の上に出、弧をえがく雌蜺に乗り、悠永たる天河に泛ぶ。咸池を目指して一息みし、瑶台を望んで高く馳せる。理にもとる言葉を並べて奢るわけではない、仙人の方術を受けられればと願うだけである。鍾山の巖は隱鬱と、皇都を前にしてそそり立つ。山川の祭祀に尊重され、風雲を含んで慈雨の恵みを下すところ。その様子は、高く大きく、険しくそびえ、高くのびた枝は日を拂い、高々とそびえるさまは、天から墜ちた石や星をつみあげたよう。高く突き出たり岩がゴロゴロしており、くぼんだ所や平らな所がある。盤のように堅く枕のように横たわり、怪しい状や変った形のものがある。細い坂道が横にかかり、洞穴は斜めに通っている。この山は、千丈万仞、幾度となく積み重ねられて出来あがったようだ。町や村をめぐり、郊外にまたがり、夕暮には素煙を帯び、晨には白霧をめぐらせている。近づいて見ると同じ巖でも色あいを異にし、遠くからながめると百嶺すべて青一色である。

西・東晋二代の陵墓を見、摧れ残された墓道に目をやる。成帝は虐い小臣の蘇峻につまずき、康帝は政事を権

臣に委ねて名だけの地位に矜を正した。穆帝は朝廷において我が身を恭しみ、簡文帝は玄理の道に心を遊ばせた。孝武帝は酒を飲みすぎて災いを招き、安帝は物事を深く考えずに崇りを受けた。それにつけても開国の主君の何とすぐれた人物であったことか、その威光は天に横たわり地を陵いで輝いた。文徳のある天子が武徳の業を受けついで、ようやく隆平の治を招来することができる。厚徳の我が祖先が主君として奉じた天子たち、遺された知行地を仰いでは涙にくれる。

天子の墓陵は一つではなく、仙館は遠くに距たっている。席には駢駒がおかれ、堂には桂酒がそそがれ、紫皇を天門より迎え、娥皇と女英とを湘水の渚から招く。蘭香を桂棟に浮かべて、巫陽を南楚から召しよせる。巫陽は玉桴を揚げ、椒と糝を握り、悦として風に臨んで浩唱し、瓊茅を折ってたたずみ、「敬しんで思うに、天路ははるかに遠く、神蹤はひろびろと果てしない」という。わが念いは驚颯よりも甚しく、生は聚まれる沫のようなもの。靈妙なる乗物として一乗の法華経に託し、幽遠なる扉を天眼・宿命・漏尽の三達によって開こう。心を息わせ累いを去ろうとすれば、必ず人を避けてのちに豁とするにちがいない。椽を巖根に結びつけたり、櫓を梢のところを開いたりする。部屋は蔦かずらのために暗く、檐には松や栝の梢がのぞく。既に物と我とを兼ね忘れる理

法を得たからは、飢えや渴きなどは固り忘れてゐる。枝に攀じのぼつて独り遠く去つたり、雲を陵いで高く行く。葺茨かひぶきによつて名をあげるのは、仏の教えによつて悟りを開き名を立てるのと同じこと。今この時に己を忘れることができれば、どうして来世を期待することがあろうか。

天は私に大徳たいてくを与えてくれており、無上の賜物を受けているのだ。老夫らうふという嘉よ稱をを受け、大学での宴席に侍ることを許されている。私には「驥きを希いう」という秀れた気質は無く、また「珪けいの如し」といわれるほどの令望に乏しいのに、昔は旧主からの恩恵を蒙り、今は重ねて天子の厚遇を受けている。老者を安んずるといふすばらしい則のりにより、衰老のわが身の辞職を願ひ出た。役職につくのを勞とされ免職を許されたが、まだ東宮の職を奉じている。時に陋屋に帰り、聊か暇にまかせて遊樂し、わが志を淨らかな仏の国に住ませ、わが心を修道の場におちつかせる。獸は庭にあつて駭くことなく、魚は沼に満ちて取られることはない。迷まよひきたつた塗ぬちから車を引き返し、過去を反省して将来に思いをはせる。

おそ咲きの花が開くと、初めの花は蕊いぶきが落ちる。別々の林で赤と青の色どりを異にしていたものが、たちまち風のために紅と紫がまじってくる。紫の蓮の花が夜に発はらき、紅い荷が暁に舒ゆるびる。軽やかな風が微かすかに動いて、

その芳香が流れてくる。風は園にちの樹にさやさやと吹き、月は池のほとりの竹に照りはえる。簷の柱は長い枝をかまませ、庭の菊は黄色の花をつけている。氷は穴に垂れ下り中洲につらなり、雪は松にかかり野を被う。鴨は寄り集まつて飛び分散せず、雁は高く翔んで下りようとしている。いずれも時節の物として懐しむに足るものであつて、自分の外から来たものではあるが假の物ではない。まことに本性の落ちつく所であり、心ひかれて捨てさることのできないものである。

私の気持ち年をとるにつれて弱くなつてくるのを情けなく思い、憂うれひが胸の中に溢れてくる。悲哀は道が違つても帰を同じくするが、歎なげびは途が違つていて皆な失われる。私は時に魚や鳥を眺めて過し、閑いさまな時間は草のいおりで送る。傍には呉の美女もおらず、前には趙の琴も無く、こうして晩年を終え、ここで日を過ごそうと思ふ。ただ、天地のごとき恩恵に報いることなく、事跡を記録する官は（私について）何も記さず、いたずらに高門の地位にいて重んぜられ、良史の筆に記されないので残念である。長くためいきをついて何も言うことはない。あゝ、わが心に愧かたじけなうことは一つだけではない。

やがて特進を加えられ、光祿大夫・侍中・太子少傅はもとのままであつた。天監十二年、官職にあるまま亡くなつた。七十三歳であつた。詔勅によつて、本官が贈られ、葬

儀料として錢五万、布百匹を賜わり、「隱」と謚された。

約の左目は瞳が重なっており、腰には紫のあざがあつて、その聡明なること人に過ぎていた。書物を聚めて二万卷にもなり、都で彼に比べられる者はいなかった。幼少にして父を亡くして貧しく、親戚にたのんで、米數百斛を得たが、侮辱されたので、その米をひっくりかえして帰つたこともあつた。貴い身分になつても、それを後悔していかなかったと、郡の言い伝えになつてゐる。かつて武帝の宴席に侍つていた時、妓師がいて、それは齊の文惠太子の宮人であつた。帝が「座中の客に面識があるか」と問ねると、「沈家令だけを知っています」と答えた。約は座に伏して涙を流し、帝もまた悲しんだ。そのため酒宴は止めになつた。

約は宋・齊・梁三代に歴仕し、旧い法令をすべて知っており、博識で見聞が広く、当時の規範とされた。謝朓は善く詩を作り、任昉は文章に巧みであつたが、約はその両者の才を兼ねていた。しかし、しのぐことはできなかつた。高才を自負していたが、榮利にくらく、時運に乗じて權勢の地位にのぼり、ひどく清談にふけた。宰相の地位につくと、少しは止足を知るようになり、一官を進められるたびに、殷勤に退官させてくれるように願ひ出たが、終りまで去ることができなかつた。論者は彼を山濤とくらべてゐる。政事にたずさわること十餘年、人物を推薦したことは一度も無く、政事の得失に関しては、ただ「はい、はい」

と言うだけであつた。

その初め、高祖は張稷<sup>④</sup>について心残りに思うことがあつたが、稷が死ぬと約にその話をした。約は「尚書左僕射が地方に出て辺州の刺史とされたのですが、しかしそれもすんでしまつたこと。いまさら論ずることもありませんまい」と言つた。帝は約が稷と姻戚関係にあるためにその肩を持つのだと思ひ、たいへん怒つて、「そなたの今の言葉は、忠臣といえるか」と言ひ、輦に乗つて内殿に歸つてしまつた。約は懼れ、高祖が起ちあがつたのにも気づかず、まだ初めのように坐つていた。邸に歸りつくと、まだ牀に至らないうちに、から足をふんで戸の下につまづき、それがもとで病氣になり、齊の和帝に劍でその舌を断られる夢を見た。巫を召して病氣を視させたが、巫の言は夢と同じであつた。そこで道士を呼んで赤章<sup>⑤</sup>を天に奏し、禪代のことは自分から言ひ出したのではないと稱した。高祖は上省の医者である徐奘を遣わして約の病氣を診させた。奘はつぶさにそのありさまを申し上げた。これより先、約は宴に侍したが、その時、予州から徑一寸半ほどもある栗を献上してゐた。帝はこれを珍らしく思ひ、「栗のことでどれくらい知つてゐるか」と問ねた。そうして約と各々知つてゐることを書き並べたが、約は帝より三事少なかつた。その場を下つて人に言うには、「この方は、負けずぎらい。もし譲らねば、羞ぢて死ぬであろう」と。帝はその言葉が不遜で

あるため、罪にあてて処罰しようとしたが、徐勉が固く諫めたので、なんとかその場はおさまった。のちに赤章のことを聞くと非常に怒り、使者を遣して数々譴責させた。約は恐れ、そのために死んだ。役所では「文」という謚を送ったが、帝は「情を懐きながら、それを尽くさないのを隠という」と言ったので、「隠」と改めたという。

「晋書」百十卷、「宋書」百卷、「齊紀」二十卷、高祖紀十四卷、「邇言」十卷、「謚例」十卷、「宋文章志」三十卷、「文集」百卷を著わし、皆な世に行なわれた。また「四声譜」を撰し、「昔の詩文の作者は、四声について何千年も気づかなかった。それを自分だけが胸のうちに覚り、その妙旨を窮めたのである」として、入神の作と考えた。高祖はもともと四声など好まなかつた。ある時、周捨に「何を四声というのか」と問うと、捨は「天子聖哲」がそれぞれでございます」と答えた。しかし帝は一度もそれを遵用しなかつた。

子の旋は、約の生時、すでに中書侍郎、永嘉太守、司徒従事中郎、司徒右長史を経ていた。約の喪に服したのち、太子僕となつたが、復た母の死によつて官を去り、菜食して穀物をとらず、服喪がおわつても、まだ糲梁を絶つていた。のちに給事黃門侍郎、中撫軍長史となり、地方に出て招遠將軍、南康内史となつたが、清治という評判があつた。在職中に亡くなり、恭侯と謚された。子の寔が後を嗣いだ。

陳の吏部尚書姚察のことは、

その昔、木徳の齊が謝まろえるや、東昏侯が暴虐をほしいままにし、民衆は恐れおののき、その命は旦夕に迫つていた。高祖は乱れた世を濟うことを使命とし、中国を安定させることを志し、帷幄に謀りごとをめぐらすに、張良・陳平のごとき臣にたよつた。范雲・沈約は、梁国の創造にあづかり、帝業の成就をたすけた。また范雲は機智に富み聡明であつたので、務めを成しとげ時世に役立つた。沈約は高才にして博学、その名は司馬遷・董仲舒に次ぐ人であつた。いづれも梁の興運にあづかつており、一代の英偉といえよう。

#### 注

- 1 林子―「南史」卷五七
- 2 璞―「南史」卷五七
- 3 誅殺され―「南史」に、「元嘉三十年、元凶 弑立し、璞は奉迎の晩きを以て殺さる」とある。
- 4 蔡興宗―「宋書」卷五七
- 5 文惠太子―世祖武皇帝の長子。「南齊書」卷二一
- 6 竟陵王―世祖の第二子。「南齊書」卷四十
- 7 永元二年―「永元」は齊の東昏侯の年号。四九九年。
- 8 建康城が平定されると―高祖が東昏侯を滅ぼしたこと。
- 9 攀龍附鳳―「後漢書」光武紀に、「士大夫の大王に矢石の間に従ふや、固より龍鱗に攀ち鳳翼に付き、以て其の志すところを成すを望むのみ」と。

- 10 樊・沔ともに東昏侯との戦いに出てくる地名。
- 11 建安公の封土―高祖のかつての封号。
- 12 約は手をあげて左を向いた―高祖受禪後の范雲の官を意味すると思われる。「梁書」本伝には、「天監元年、高祖受禪す。……是の日、散騎常侍・吏部尚書に遷り、佐命の功を以て霄城侯・邑千戸に封ぜらる」と。
- 13 梁国の政府ができる―「梁書」卷一、中興二年正月の詔に、「其れ位を相国に進め、百揆を総べ、揚州刺史とし、十郡に封じて梁公と為し、九錫の礼を備えよ……」と。
- 14 徐勉―「梁書」卷二五、「南史」卷六十
- 15 永明―齊の世祖の年号（四八三―四九三）
- 16 建武―齊の高宗の年号（四九四―四九七）
- 17 徐令―齊の尚書令であった徐孝嗣を指すのであろう。
- 18 東田―文惠太子が鍾山の下に建てた樓觀のことであるが、ここはその地を指すか。
- 19 海昏侯の爵位―沈戎が光武帝によって海昏侯に封ぜられた。「南史」沈約伝
- 20 河・濟の地―世に重んじられ―「国語」鄭語に、「鄭の桓公、幽王の乱に値ひ、地を避くるの策を史伯に問ふ。史伯曰く、其れ河・濟の間かと。後遂に虢・檜を伐ちて、世々其の地を有す」と。
- 21 班生の百年を―ほどであった―「漢書」叙伝に、「始皇の末、班壹は地を樓煩に避け、馬牛羊 数千群を致す。漢初 定まれるに値ひ、民と禁なし。孝惠高后の時、財を以て辺に雄たり。出入 弋獵に旌旗鼓吹あり。年百餘歳、寿を以て終る」と。
- 22 隆安年間―東晋、安帝の年号。（三九七―四〇一）隆安年間には、五胡が中国を乱し、会稽王道子が権を専らにし、王恭や殷仲堪が謀反するなど、国運は艱難をきわめた。
- 23 如莽―「左氏伝」哀公元年に「骨を暴すこと莽の如し」とある。
- 24 朱方―春秋、呉の地名。江蘇省丹徒県。
- 25 風に憑つて―林子が武帝に頼つて力をのばすことができたこと。「南史」沈約伝に見える。
- 26 建康を指して―林子が高祖に従い、都を目指して南下したこと。「南史」沈約伝に見える。
- 27 南の大通りを―武帝の時、林子は征戦の功によって建武將軍に任じられ、また文帝の時、建威將軍、河東太守に任じられた。その子の璞は淮南太守となる。祖父、父ともに出世したことをいう。
- 28 四代―宋から梁にかけて、沈約に至るまでの世代。穆夫、林子、璞、約をいうのであろう。
- 29 白社―河南省洛陽の東にあつた。「晋書」隱逸・董京伝に、「京、字は威輦、常に洛陽の白社中に宿す。時に市に乞ひ、残碎の糲絮を得、結びて以て自ら覆ひ、全帛 佳綿は、則ち肯て受けず」と。
- 30 梁鴻のように―「後漢書」梁鴻伝に、「乃ち共に霸陵山中に入り、耕織を以て業と為す。……遂に呉に至る。大家臯伯通に依りて廬下に居り、人の為に賃舂す。」と。
- 31 耿介の思い―世俗と妥協せず、道を守り身を清くせんとする思い。
- 32 東の丘―陶潜「歸去來辭」に、「東臯に登りて舒嘯し、清流に臨みて詩を賦す」と。
- 33 応璩はしばしば―「應璩が魏に仕えて志を得なかつた時、詩を作つて、「朱糸を牽くを悟らず、三署来りて相尋ぬ」と。
- 34 陸機は世網に―陸機の「洛に赴く道中にて作る」詩に、「借問す 子何くに之く、世網 我が身に嬰れり」とある。
- 35 帰らんかな―「論語」公治長に「子、陳に在りて曰く、帰らん

- かな、帰らんかなと」とある。
- 36 牧誓―「尚書」牧誓の序に、「(武王)、受(殷の紂王)と牧野に戦ふ。牧誓を作る」と。
- 37 湯誓―「尚書」湯誓序に、「伊尹、湯を相けて桀を伐ち、升ること曠よりす。遂に桀と鳴條の野に戦ふ。湯誓を作る」と。
- 38 玉のごとくであった―「左氏伝」昭公十二年に、「詩に曰く、我が王度を思ひ、式て玉の如く、式て金の如くし、民の力を形にして、酔飽の心無けん」と。
- 39 天子の輔佐役に―約は梁国が建った時、吏部尚書・尚書右僕射となった。
- 40 高固のように―「左氏伝」成公二年に、「齊の高固、晋師に入り、石を桀げて以て人に投じ、之を禽にし其の車に乗り、桑の本に繋ぎ、以て齊の壘に徇へて曰く、勇を欲する者は、余が餘勇を賈へと」とある。
- 41 魯仲連のように―「史記」魯仲連伝に見える。
- 42 陽烏を除いて―建昌県侯に封せられたことをいう。
- 43 長河・泰山に誓って―封爵を受けて、長河や泰山のように永遠に、国家を安泰に保ち、子孫に伝える。「漢書」功臣表に、「封爵の誓に曰く、長河をして帯の如く、太山をして礪の如くならしむるまで、国以て永く寧く、爰に苗裔に及ばんと」と。
- 44 孫叔敖は―「列子」説符に、「孫叔敖 死し、王は美地を以て其の子を封せんとす。子は辞して受けず、寢丘を請ふ。之を与ふ。今に至るまで失はず」と。
- 45 蕭何は―「史記」蕭相国世家に、「何の田宅を置くや、必ず窮処に居り、家を為るや、垣屋を治めず。曰く、後世 賢なれば、吾が儉を師とせん。賢ならざれば、勢家の奪ふところと為る母らん」と。
- 46 希微の詩―小雅・斯干の詩か。「風雨の除る攸、鳥鼠の去る攸、君子の芋なる攸」とある。
- 47 その竹は―「淮南子」墜形訓に、「東南方の美なる者は、会稽の竹箭あり」と。
- 48 九州の宝蔵―天下(九州)各地の特産。
- 49 張禹は四百頃の―「漢書」張禹伝に見える。
- 50 顔淵は五十畝の―「莊子」讓王に、「(顔) 回に郭外の田五十畝有り、以て糝粥を給するに足る。郭内の田十畝、以て糸麻を為すに足る。琴を鼓し以て自ら娛むに足る。夫子の道を学ぶ所は、以て自ら樂しむなり」と。
- 51 暁の蓐を―孫晨の故事。「三輔決録」に、「孫晨、字は允公。家貧にして、席を織りて業と為す。詩書に明らかにして、京兆の功曹と為る。冬月、被無し、蒿一束あり。暮に臥し朝に収む」と。ここは話が少しちがう。
- 52 千斯の倉―「毛詩」小雅・甫田に、「曾孫の稼、茨の如く梁の如し。曾孫の庾、坻の如く京の如し。乃ち千斯の倉を求め、乃ち万斯の箱を求む」と。
- 53 汶陽―魯の地名。「左氏伝」僖公元年に、「公、季友に汶陽の田と費とを賜ふ」と。
- 54 三鳥―青鍾・鶴・燕子の三鳥。書翰を伝える。「楚辞」九歎に、「三鳥は飛びて以て南よりし、其の志を覽て北せんと欲す」と。
- 55 もとの歩き方を忘れる―「莊子」秋水に、「且つ子、独り夫の寿陵の餘子の、行を邯鄲に学ぶを聞かずや。未だ国能を得ずして、又た其の故行を失へり。直だ匍匐して帰るのみ」と。
- 56 此の地に遊んだものだ―沈約の東田の宅は、文惠太子の旧園に近く、太子家令であった時に従って遊んだことを思いおこしている。

- 57 西陵—曹操が葬られた所。ここでは文惠太子の墓地を指す。陸機「魏の武帝を弔う文」に、「總帳の冥漠を悼み、西陵の茫々たるを怨む」と。
- 58 商廳館—世祖の建てた館。
- 59 孫後の墓田—「吳志」孫策伝に、「堅薨じ、還りて曲阿に葬る」と。
- 60 徒らに石椁の—未詳。
- 61 皇太子—文惠太子を指す。
- 62 成帝—東晋第三代の天子。
- 63 康帝—東晋第四代の天子。
- 64 穆帝—東晋第五代の天子。
- 65 簡文帝—東晋第八代の天子。
- 66 孝武帝—東晋第九代の天子。
- 67 安帝—東晋第十代の天子。
- 68 驛駒—犠牲の馬。
- 69 紫皇—太清九宮中の最高の神
- 70 巫陽—古えの卜筮の名人。「楚辞」招魂に、「帝、巫陽に告げて曰く、人有り 下に在り。我これを輔けんと欲す。魂魄 離散す。汝筮して之に予へよ」と。
- 71 瓊茅—卜占に用いた靈草。
- 72 一乗—仏法の悟りを開くための乗り物。「法華経」方便品に、「十方仏土の中、ただ一乗の法あり」と。
- 73 三達—天眼（未来の生死因果を知る）、宿命（過去の生死因果を知る）、漏尽（現在の煩惱を知って、これを断つ）をいう。
- 74 葺茨によって名をあげる—隱者のくらしをして世に名をあげる。
- 75 己を忘れる—「莊子」天地に、「治有り 人に在り、物を忘れ天を忘る。其の名を己を忘ると為す。己を忘る人、是れをこれ天に入ると謂ふ」と。
- 76 大徳—「易」繫辞伝下に、「天地の大徳を生と曰ひ、聖人の大宝を位と曰ふ」と。
- 77 老夫—七十歳で退職した大夫の自稱。「礼記」曲礼上に、「大夫は七十にして致事し、若し謝するを得ざれば、則ち必ず之に几杖を賜はり、行役に婦人を以てし、四方に適くに安車に乗り、自ら老夫と稱す」と。
- 78 驥を希ふ—「楊子法言」学行に、「驥を希ふ馬も亦た驥の乗なり、顔を睇ふ人も亦た顔の徒なり」と。
- 79 珪の如し—「毛詩」大雅・卷阿に、「顯々印々、圭のごとく璋のごとく、令聞令望あり」と。
- 80 老者を安んずる—「礼記」王制に、「百官 齋戒して質を受け、然るのち老を休め農を勞ふ」と。
- 81 魚は沼に満ちて—「毛詩」大雅・靈台に、「王、靈沼に在り、於 芻ちて魚躍る」と。
- 82 假の物ではない—陸機「招隱詩」に、「至楽は假ること有るものに非ず、安んぞ醇樸をうすくするを事とせん」と。
- 83 沈家令—沈約は文惠太子の下で太子家令をつとめた。
- 84 謝朓は善く詩を作り—「南齊書」謝朓伝に、「朓は草隸を善くし、五言詩に長ず。沈約 常に云ふ『二百年來、此の詩無し』」と。
- 85 任昉は文章に巧みであつた—「梁書」任昉伝に、「昉は雅より善く文を属り、尤も載筆に長ず。才思 窮まり無し。当世王公の表奏、請はざる莫し。昉、起草すれば即ち成り、点竄を加へず。沈約は一代の詞宗、深く推挹する所となる」と。
- 86 張稷—「梁書」卷十六。
- 87 尚書左僕射が—「通鑑」梁紀（天監十年）に、「尚書左僕射

張稷、自ら謂ふ、功大にして賞薄しと。(胡注：稷は齊の東昏侯を殺すを以て功と為す。)嘗て宴に榮壽殿に侍す。酒酣にして、怨望は辞色に形はる。上曰く、卿の兄は郡守を殺し、弟は其の君を殺す。何の名稱あらんやと。稷曰く、臣は乃ち名稱無きも、陛下に至りては、勲無しと言ふを得ず。東昏 暴虐にして、義師亦た来たりて之を伐つ。豈に臣に在るのみならんやと。上は其の須<sup>ひ</sup>を<sup>と</sup>持りて曰く、張公は畏る可き人なりと。稷既に懼れ且つ恨み、乃ち外に出でんことを求む。癸卯、稷を以て青・冀州刺史と為すと。

88 和帝—齊の最後の天子。

89 赤章—道士が天に祈る時に用いる、赤紙にしたためた文章。